
バイ菌

催吐剤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バイ菌

【Nコード】

N5749P

【作者名】

催吐剤

【あらすじ】

本作品は読書時に強い不快感を生じる可能性があります。

闇に紛れ、音もなく宙に浮かぶ円盤の中で男は笑った。

男の大きく見開かれ、薄紫に充血した目は、煌々と光るディスプレイを凝視していた。

そこには地上の様子が、獲物が道を歩く様子が映し出されている。男は月に感謝した。もし今夜が満月でなければ、こんなにもはっきりと獲物の姿を見ることができなかった。

男は紫の舌で唇を舐め、獲物の味を想像した。すぐに口中に涎があふれた。

自然に男の口角は吊り上がり、鮫のようにギザギザに尖った乱杭歯が剥き出しになる。

男は唇を伝い溢れ落ちようとする涎を乱暴に拭うと、操縦桿を握りしめ、一気に手前へと引いた。

円盤は降下を開始した。

ディスプレイの中で獲物の姿が徐々に大きくなっていく。獲物はまだ円盤には気づいていない。

円盤の外部に取りつけられたマイクが音声を拾った。獲物は自分が狙われていることも知らずに、上機嫌に小唄を口ずさんでいる。

男はスピーカーをオンにし、大声で獲物へ呼びかけた。

「はあーひふうへほうーう！」

ビクリと肩を震わせ、振り向いた獲物は驚愕の表情を浮かべたが、それは瞬時に恐怖へと変わった。

獲物は円盤に背を向けて駆け出した。その背中を見つめ、男は笑う。

すぐに恐怖は絶望へと変わるだろう。

悲鳴を聞きつけた“餡パン”が駆けつけた時には“それ”はもう殺された後だった。

一目見ただけで死んでいるとわかった。

地面に横たわった“それ”には頭部がなく、両肩の間には不恰好に捻れた断面があるだけだった。

断面から壊れた蛇口のように噴き出す血が地面に溜まり、“それはまるで赤黒い水溜まりの上に浮かんでいるかのようなだった。”

“餡パン”はこのような凄惨な死体を見るのは初めてだったが、死体に驚いている余裕はなかった。死体の製作者が目の前にいるからだった。

その男はまるで悪魔のように見えた。

男は黒の全身タイツを身に纏い、紫の手袋とブーツを身につけていた。尻からは矢印形の尻尾が地面に垂れ、背中にはまるで蠅のような翅が生え、頭からは怒張した男性器そっくりの触覚が二本、天に向かって突き立っている。男の全身は血液によってずぶ濡れになり、月の光を浴びてキラキラと光り輝いていた。

「おい」

“餡パン”は震える声で男に呼びかけた。が、男はまるで聞こえていないかのように何の反応も示さず、“餡パン”に背を向けたまま両手で何かを抱え、頭を前後に動かしていた。

「おい！」

もう一度、“餡パン”が呼びかけると男は停止し、一呼吸おいて振り向いた。男は顔は身体同様に黒いマスクで覆われていた。

「出たな……お邪魔虫」

マスク越しに薄紫に充血した目で“餡パン”を睨みつけながら呟くと、紫の舌で口元を拭った。

その声は“餡パン”には聞こえていなかった。“餡パン”の意識

は全て、男が抱えているものに注がれていた。

それは碎けたスイカのように見えた。しかしそれには目や鼻や口がついており、それらが形作る表情によって、“餛飩パン”は“それが“天井”の頭部だと知った。

その口元に貼り付いた下卑たニヤニヤ笑いは“餛飩パン”にも見覚えのあるものだったが、その額のあたりから上は見覚えのないものに変わっていた。

“天井”は頭の中身を剥き出しにしていた。赤や黄や白やピンクが入り交じり、柔らかい脂肪の塊や固い骨が複雑に絡み合っている。“餛飩パン”は吐き気が込み上げるのを感じた。脚がガクガクと震え出し、膝が折れそうになるのに耐えた。

不意に男が“餛飩パン”へ向けて何かを放った。

とっさのことに“餛飩パン”は避けられなかった。両手を前に突き出し、ゆっくりと飛んできたものを遮ろうとしたが、それは綺麗に両手の間を通り、“餛飩パン”の顔にベチャリと貼りつき、顔を汚した。

湯で濡れた雑巾のような感触だった。濃い血の匂いと味がした。見なくてもわかっていた。男が放り投げたのは“天井”の一部だったものだ。

“餛飩パン”は身体を丸め、胃の中のものを盛大に地面にぶち撒けた。気管に侵入した胃液が喉を焼く痛みに噎せながら、“餛飩パン”は顔から剥がれた“天井”の一部が吐瀉物の中心に落ち、飛沫を上げるのを見た。

地面に手を突いて咳き込む“餛飩パン”を眺め、男は満月げに笑うと、“食事”を再開した。“天井”の中身に顔全体でかぶりつき、鋭い歯でブチブチと引きちぎり、グジュグジュと噛み潰しては飲み込んだ。

「やめろ……」

“餛飩パン”は声を絞りだしながら、身体から力が抜けていくのを感じた。

「やめるんだ……」

“餡パン”の声を男は聞き流し、薄紫に充血した目で“餡パン”を睨みつけたまま“食事”を続けていた。

“餡パン”はクラクラする頭で呆然と男が“食事”をするのを眺めていた。“餡パン”の精神は混乱の極みにあった。事態にどう対処すべきなのかわからなかった。

男を取り押さえるべきだと感じたが、それは不可能だと確信していた。何よりも“餡パン”は男に恐怖していた。しかし男から逃れられるとも思えなかった。今も身体に力が入らず、立ち上がることにできないでいる。

突然、頭上から「ぐええふ」と嘔吐するような音がし、“餡パン”が見上げると男が目の前にいた。近づく気配は一切感じられなかった。

「うわあああああ!!」

“餡パン”は悲鳴をあげながら飛び上がり、拳を握り締め、男の顔面目掛けて振るった。意識した動きではなかった。恐怖が身体中を支配し、肉体を突き動かしているのを“餡パン”は感じていた。

男は半身を引いて拳を避けながら右手を振り、“天井”の頭部を放り投げた。

“餡パン”は瞬時に体勢を崩し、それを避けた。左耳のすぐ側を何かが凄まじい速度で駆け抜けていく。

男はあんぐりと口を開け、目を見開いた。避けられるとは思っていなかったのだ。

“餡パン”は再び拳を振るった。今度は避けられることなく、拳は男の顔面の中心を綺麗に打ち抜いた。

男は鼻血を噴き出しながら地面に崩れ落ちた。渾身の一撃だった。骨を砕く確かな感触があった。

男を見下ろし荒く息を吐く“餡パン”は、背後で何かが潰れる音を聞いた。それが“天井”の頭部が木にぶつかり砕けた音だと気づき、ゾツとした。

男はすぐに起き上がった。鼻からドクドクと流れ出す血を舐め、喉を上下させてゴクリと飲み干すと“餡パン”を見据え、ニヤリと笑った。

と、男の姿がぶれ、“餡パン”は後ろへ飛び退いた。“餡パン”の頭があつた場所を男の右腕が薙ぐ。

“餡パン”は男の鳩尾へと右脚を叩き込んだ。が、左掌で受け止められ、脚を引く間もなく男に足首を掴まれた。

男は“餡パン”を肩に担ぐようにして、ハンマーのように顔面から“天井”の胴体へと叩き込んだ。

「これでおあいこだ」

血と肉片に塗れた“餡パン”を見下ろしながら男はそう言い、ゲラゲラと笑った。

“餡パン”は震える脚を抑え、何とか立ち上がる。それは緩慢な動作で隙だらけだったが、男は指を差して笑っているだけだった。

狂ったような笑い声を聞きながら“餡パン”は胸の奥からフツフツと沸き上がるものを感じていた。

それは怒りだった。

何故俺がこんな目に遭っているんだ、この男は何なんだ、何を笑っているんだ、何がおかしいんだ。

死体を見つけ、脳を喰っている男を見つけ、恐怖し、嘔吐し、反吐に塗れ、殴り合い、死体に叩きつけられ、鼻は折れ、血が噴き出しているというのに、そんなことは何の問題にもならない。既に全身は死体の血肉に塗れているからだ。異常だ、異常すぎる。

「あああああああああああああああああああ！！」

“餡パン”は怒りに身を任せて叫び、男へ向かって駆けた。

「さつきは驚いた」

男は言いながら、次々に繰り出される“餡パン”の拳を全て避けた。

「俺様に〈大怪我〉を負わせるとは大したもんだ」

男は、蹴りを放った“餡パン”の軸足を払い、転ばせた。“餡パ

ン”はすぐに起き上がる。

「もう少し遊んでいたいが俺様には時間がないんだ」

男が言い終える前に“餡パン”は背中に衝撃を感じた。景色が回転し、重力が消え、次の瞬間には“餡パン”は宙に浮いていた。

身体中の骨がギシギシと軋む。“餡パン”が身を振って振り返ると、そこには真っ黒な円盤が宙に浮かんでいた。円盤の下部からは銀色に光る大蛇のような金属製のケーブルが伸びており、“餡パン”はケーブルから生えた巨大な手に身体を握られていることを知った。

「くそっ！」

“餡パン”が暴れると、身体を握る力が増した。“餡パン”は苦痛に呻きながらも何とか拘束から逃れようと全身に力を込めたが、手は身体をガツシリと掴んで離さない。

「はあーひふうへほうー！」

“餡パン”に顔を近づけ、男は笑った。その拍子に、天に向かって突き立つ二本の怒張した男性器そっくりの触覚が揺れ、その先から血が飛び跳ねるのを“餡パン”は見た。

「どうした、俺を喰うんだろう……早くしたらどうだ？」

自分の声が震えているのを聞き、“餡パン”は自分が再び恐怖していることを知った。

「いいや、お前は喰わない」

男ははっきりと宣言した。

「お前を喰えば話は早いんだろうが、あの爺が何を仕掛けているかわからないからな」

「何を……」

“餡パン”は思わず聞き返していた。

「そうだ。お前も良く知ってるだろう？ あの手……“ジャム”」

“ジャム”がどうしたって……

「待て」

“餡パン”の問い掛けを男は手で制し、ゆっくりと月を見上げ、

の世界にいる他の誰にもそんなことは出来ない。とにかく“ジャム”とその周辺は異常なことだらけだ。なのに誰もそのことに疑問を抱かない。何故だ？」

“餡パン”は黙っていた。

「俺様は手当たり次第に訊いて回った。何かがおかしい、そう思わないかと。だが俺様が訊いた奴は皆、今のお前のように呆けたツラをするだけだった。なあ、何かがおかしい、そう思わないか？」

“餡パン”は答えられなかった。そのことについて考えようとすると頭の中に靄がかかったようになり、思考がまとまらずに霧散してしまうことに“餡パン”は気がついた。

「かつては俺様の脳も今のお前のような有り様だった。“ジャム”の異常性が見逃されているのはこのせいだ。たとえ何かに気づいたとしても、すぐに忘れてしまう。“ジャム”についての疑問を抱いても、次の日には疑問そのものが消えている。記憶を繋ぎ止める作業に翻弄されながら、それでも俺様は薄れる記憶を繋ぎ合わせ、思考を続け、ある日、唐突に鍵を見つけた。何故“ジャム”はわざわざパンを作り、配っているのか。皆が“ジャム”のパンを食しているのは何故か。“ジャム”はパンに何かを仕込んでいるのではないか。それから俺様は奴の作るパンを喰うのをやめた。想像を絶する飢えが襲いかかってきたが、効果は期待以上だった。記憶は薄れることなく、意識は連続性を保ち、明確な思考が可能となった。俺様の脳は自由を手に入れた」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5749p/>

バイ菌

2011年1月6日17時55分発行